

第2回 北海道地方における流域治水のあり方検討会 議事要旨

令和5年3月6日（月）13:00～15:00

札幌第一合同庁舎2階講堂

（第1部 水害リスクの考え方について）（参考資料 諸外国の水害リスク適応事例について）
主な意見は以下のとおり。

- ・ 今後、スマートシティが進む中で様々なものがシステム化されるため、水害リスクに対する脆弱性が高くなると考えられる。将来の社会変化を考慮してリスクを評価する必要がある。
- ・ これからの社会の変化を踏まえ、どのようにリスクを評価するか、検討して欲しい。
- ・ リスクを受ける側の立場に立ち、どんな頻度で生じるか等、リスクをわかりやすくする工夫が必要である。
- ・ 北海道はアンサンブルデータがあるので気候変動後 2°C上昇、4°C上昇の将来の頻度を示すことができる。30年後、50年後にどのようなハザードが起きて、どのようなリスクになるか、頻度でリスクを知ることが重要である。
- ・ 既存の治水計画、河川整備計画等との関係が重要となる。現状と、計画が完了した後等、時間軸の中でリスクを考えることが重要である。
- ・ 計画対象降雨と計画を超える雨、最大規模、全て対象とするのではなく、どこに重点を置くか、ハザードの規模を考えることが重要である。
- ・ 海外事例について、意思決定の流れは参考になるため、事業を進めていく過程の中で試行錯誤した事例等も紹介してほしい。
- ・ リスク等の話を住民等に行うときに、我がこととして理解してもらうためには、対策を講じることによる平時のメリットも併せて説明してほしい。
- ・ 個人を対象とした場合、自身の生涯が時間軸となる。我がこととして捉えてもらうためには、地域の未来像が見えるようにすることは重要と考える。
- ・ 平時も考えたリスクの出し方について、検討してほしい。
- ・ 都市計画と治水計画では計画策定までの期間が異なる一方で、相互の計画の策定による影響を考えられるよう、時間軸を調整できる仕組みがあると良いのではないかと考える。
- ・ 農作物の種類によって被害の有無や規模が異なるため、被害率と浸水深の関係について詳細に検討することで、作物に応じたリスクが見えてくるのではないかと考える。
- ・ どのような目標を設定してマップを提示するのか、諸外国の事例を参考にすると良い。
- ・ 流域治水を推進するためには、高頻度で生じる小規模降雨に対しても、どのように対策を考えていくかが重要である。
- ・ 水害リスクについて、地震等の他の災害と比較してどのくらいのリスクであるのかという観点があると良いのではないかと考える。
- ・ 大きな被害であれば浸水することは諦めるが、早く復旧させること、重要な施設は浸水させない等、平均的な考えではなくいろいろな考え方があることを考える必要がある。
- ・ 流域治水を推進するには、諸外国の事例が有用になるが、上手くいってない事例の課題を整理することも有効と考える。

(第2部 「水害に強いまちづくりマップ(仮)」の考え方について)

主な意見は以下のとおり。

- ・ リスク評価は、多様な人に関心を持ってもらうことが必要である。災害が起きたときの被害の広がり方を提示することにより、主体が広がるのではないか。
- ・ リスクの提示方法について、公共的な関心が生み出されるように工夫して欲しい。
- ・ 流域治水を考えるベースとして、自分の行為が流域に影響を与えることもあり、運命共同体という意識を持ってもらうことが重要である。
- ・ 我がこととして捉えられるリスク提示が必要であり、住民を巻き込んだ議論が必要である。また、実際の被災者やボランティア等の生の声を聴くことは我がこととして捉えてもらうための有効な手段と考える。
- ・ 堤防強化の進捗等、適切な情報をマップに反映してもらえれば、住民に役立つ情報になると考える。
- ・ 人口変動、高齢化、施設の老朽化等により暴露が変わるため、将来の変化をどう捉えるかが重要である。
- ・ リスクについては現在だけでなく、将来のリスクも見据えて、地域づくりに活かされるような打ち出し方を検討して欲しい。
- ・ 流域治水では、被害を許容することも1つの地域の選択肢である。こうした地域のリスクコミュニケーションを行う上で、どんなリスクがあるかを知ってもらう必要があり、入口としてリスクの提示は必要である。そのうえで、被害は防げないけど早く復旧する等、選択肢として対策に結び付くシナリオをマップと併せて整理することも重要である。
- ・ 気候変動後の2°C上昇、4°C上昇の世界がいつ来るかを認識してもらうことで意識が高まると考える。現在1.1°C上昇の世界にいて、これから2°C上昇の世界になり、2°C上昇に収まったとしてもどのくらい続くといった感覚も伝えることが重要である。
- ・ FNカーブは1つのものの見方として重要と考える。流域ごとにどの外力でリスクが増大するポイントがあるか、それがいつぐらいに起こりうるのかを地域に提示していくことで、それぞれ異なる主体が我がこととして捉え、さらに意思決定につながると考える。
- ・ 流域治水の目標は、地域が決めるものであり、地域の方々が意思決定できるようにすることが重要である。
- ・ 地域を限定して、実際に地域の人々と議論を行い、我がこととして理解してもらえる指標、シナリオを考えていくことも必要である。
- ・ 街づくりの対策は非常に時間がかかるので、気候変動の状況においてハザードがどう変化するかという観点が非常に重要である。
- ・ 流域の利益相反に関連して、オランダの事例ではソーシャルリスクという考え方があり、社会的に重要な地域に関しては安全度を変える考え方もある。例えば、「ここだけは守る」とする場合、どのような対策を組合せるのか考えことになるが、その際、のハード対策の意味も変わってくるのではないかと考えられる。

(以上)